

2001年7月22日

みんなと同じ～イスラエル王制の始まり～

【聖書】 サムエル記上8章1～22節 ◆民、王を求める

8:1 サムエルは年若い、イスラエルのために裁きを行う者として息子たちを任命した。8:2 長男の名はヨエル、次男の名はアビヤといい、この二人はベエル・シェバで裁きを行った。8:3 しかし、この息子たちは父の道を歩まず、不正な利益を求め、賄賂を取って裁きを曲げた。8:4 イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、8:5 彼に申し入れた。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」

8:6 裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った。8:7 主はサムエルに言われた。「民があなたに言うままに、彼らの声に従うがよい。彼らが退けたのはあなたではない。彼らの上にわたしが王として君臨することを退けているのだ。8:8 彼らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、彼らのすることといえば、わたしを捨てて他の神々に仕えることだった。あなたに対しても同じことをしているのだ。8:9 今は彼らの声に従いなさい。ただし、彼らにはっきり警告し、彼らの上に君臨する王の権能を教えておきなさい。」

8:10 サムエルは王を要求する民に、主の言葉をことごとく伝えた。8:11 彼はこう告げた。「あなたたちの上に君臨する王の権能は次のとおりである。まず、あなたたちの息子を徴用する。それは、戦車兵や騎兵にして王の戦車の前を走らせ、8:12 千人隊の長、五十人隊の長として任命し、王のための耕作や刈り入れに従事させ、あるいは武器や戦車の用具を造らせるためである。8:13 また、あなたたちの娘を徴用し、香料作り、料理女、パン焼き女にする。8:14 また、あなたたちの最上の畑、ぶどう畑、オリーブ畑を没収し、家臣に分け与える。8:15 また、あなたたちの穀物とぶどうの十分の一を徴収し、重臣や家臣に分け与える。8:16 あなたたちの奴隷、女奴隷、若者のうちのすぐれた者や、ろばを徴用し、王のために働かせる。8:17 また、あなたたちの羊の十分の一を徴収する。こうして、あなたたちは王の奴隷となる。8:18 その日あなたたちは、自分が選んだ王のゆえに、泣き叫ぶ。しかし、主はその日、あなたたちに答えてはくださらない。」

8:19 民はサムエルの声に聞き従おうとせず、言い張った。「いいえ。我々にはどうしても王が必要なのです。8:20 我々もまた、他のすべての国民と同じようになり、王が裁きを行い、王が陣頭に立って進み、我々の戦いをたたかうのです。」8:21 サムエルは民の言葉をことごとく聞き、主の耳に入れた。8:22 主はサムエルに言われた。「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい。」サムエルはイスラエルの人々に言った。「それぞれ、自分の町に帰りなさい。」

【序】 敗北から勝利に

サムエルは30才の時、ペリシテとの決戦でイスラエルが大敗北する挫折を経験しました。育ての親であり、信仰の父であったエリを失い、神の箱は奪われ、神殿は破壊されてしまいました。日本が戦争に負けた時、私は13才の少年でしたが、それでも私は大きな衝撃を受けて人生の目標を失いました。私に剣道を教えてくださった小学校時代の受け持ちの先生は、教師を辞めてしまいました。ですから30才のサムエルが受けた衝撃は、私の思いをはるかに超えて、深かったに違いありません。

ん。

以来サムエルは祭司一族から離れ、7ヶ月後に戻って来た神の箱とも接触を断って、独り新しい歩みを模索したようです。そして士師・祭司の勤めを果たしながらも、悔い改めを迫る預言者の働きを始めたようです。「心を尽くして主に立ち帰ろう。そうすれば主はあなたたちをペリシテ人の手から救い出してくださる」という彼のメッセージが、少しずつ少しずつ人々の心にしみわたって行きました。

20年たって、サムエル50才の時に、イスラエル全員がミツパに集まって「わたしたちは主に罪を犯しました」と告白できるまでになりました。そして攻めて来たペリシテ軍に、祈りによって打ち勝つことができました。人々が敗北の歴史から学んで自分を変えたとき、勝利を与えられたのです。

さてそれから後に、イスラエルの人々はどうなったのでしょうか。

[1] どうしても王が必要です

サムエルの優れた指導力のもとにイスラエルはよくまとまり、ペリシテも国境を侵さなくなりました。しかしサムエルは次第に年老いていきます。彼は息子二人に士師の務めを分担させました。ところが彼らは、エリの息子たちと同じ様に父の道を歩まず、賄賂を取って不正な裁きをするようになりました。そしてこれがきっかけとなって、王制を求める声が大きくなったのです。

長老たちが全員集まって、サムエルに申し入れました。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」

サムエルは賛成できませんでした。イスラエルは神の民です。神さまが主としてご支配しておられるのですから、神さまのほかに王を求めるなど、間違っています。でも自分の息子たちの不正が原因でこのような間違った要求が出てきたことに、サムエルは深い責任を感じたことでしょう。彼は恩師のエリが息子たちのことでどんなに深く悩んだかを身近に見ながら育ちました。そしてエリとその家にくだった神の裁きを痛烈に体験したのです。

その自分がエリと同じ誤りを繰り返しています。自分の家庭教育の失敗が、人々に王を求める誤りを犯させようとしているのです。ですから人々を責める資格がありません。ただただ神さまにお詫びを申し上げる以外になかったのではないのでしょうか。嘆きの祈りに対する神さまの答えは、慰めに満ちたものでした。

「彼らが退けたのはあなたではない。彼らの上にわたしが王として君臨することを退けているのだ。——今は彼らの声に従いなさい。ただし、彼らの上に君臨する王がどういうものなのかを教えて、はっきり警告しておきなさい。」

そこでサムエルは皆に教えました。王を立てて外国の圧力に対抗する軍事力を持つとすれば、専門の軍人を雇い、よい武器を整えなければならない。公務員も必要になる。彼らの給料のために土地を没収され、税金も重くかかってくる。王のためにいろいろな労働にかり出されるようになる。そして遂には国民全体が王の奴隷になってしまうぞ。でもそれが王制の当然の性質なのだから、その時になっていくら泣き叫んで祈っても、事態は変わらない。それでもよいのか。

しかし長老たちは言い張りました。「いいえ、我々はどうしても王が必要なのです。我々もまた、他のすべての国民と同じようになり、王が裁きを行い、王が陣頭に立って進み、我々の戦いをたたかうのです。」神さまはサムエルにおっしゃいました。「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい。」

[2] 歴史の流れ

イスラエルの民は、モーセに導かれてエジプトを脱出し、カナンの地を目指しました。そして後継者ヨシュアのもとでカナンに定住します。ヨシュアの後が士師の時代で、それから王制が始まります。ところでこの士師の時代を記した士師記の終わりには、イスラエル12部族の中のダン族がエルサレム近辺に割り当てられた土地から、勝手にずっと北に移動してヘルモン山の麓のライシュに住むようになった顛末が記されています。

5人の勇士が土地探しに派遣されました。彼らは北上してライシュに来ました。そしてすぐに引き返して報告しました。「非常によい地だからすぐに攻め上って手に入れよう」。そして600人の部隊で襲いかかり、住民を殺して占領してしまいます。滅ぼされたライシュの人について、士師記はこう記しています。「その地の民が、シドン人のように静かに、また、穏やかに安らかな日々を送っているのを見た。その地には人をさげすんで権力を握る者は全くなく、シドン人からも遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかった」(士師記18:7)。

権力を握って支配する者がおらず、皆が穏やかに安らかに暮らしていたとは、なんと麗しいことでしょうか。でも周りの世界と没交渉に暮らしていた結果、滅ぼされてしまったのです。周りの国がいつ攻めてきて自分たちを滅ぼすかわからないという厳しい世界情勢が、人々の心に次第に強く意識されるようになってきたことを物語っています。

ですから武力を整え、いざ戦争となったら、陣頭に立って敵と戦い勝利をもたらしてくれる王がほしいと、長老たちはサムエルに訴えたのでした。ライシュの人々が不足ない暮らしに満足し、権力を握って人を支配しようとする者もおらず、平和に暮らしていたのに600人のダン族に滅ぼされてしまったのです。身近な歴史が教えるこの恐れの方が、王制のマイナス点よりもはるかに大きいと思うようになったのです。神さまはこの歴史の流れをお認めになりました。そしてサムエルにおっしゃいました。「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい。」

問題は新しく立てられる王の支配が、神の支配に沿うものになるのか、打ち壊すものになるのか

かです。神さまの支配は人間を罪の奴隷から解放していくものです。しかし王制は本質的に人間を自分の奴隷にしていく動きを内にもっています。神の支配と王の支配とは鋭い緊張関係にあるということを知覚して、歴史の流れに対応していくことが、課題となってきています。

サムエルは12章の告別説教でこう語っています。「主はあなたたちに王をお与えになる。だからあなたたちは主を畏れ、主に仕え、御声に聞き従い、主の命令に背かず、あなたたちも、あなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならばそれでよい」(12:13~14)。そして王を任命する自分の責任をこのように述べています。「わたしもまた、あなたたちのために祈ることをやめ、主に対して罪を犯すようなことは決してしない」(12:23)。

サムエルが大敗北から学んだことは、心を尽くして主に立ち帰ることでした。人間が神を僕にして使おうとするところから、神と人間との関係がこわれるばかりでなく、人間関係にも破綻が生じるようになるのです。そして社会が乱れてきます。国と国との間にも争いが起こり、傷つき倒れ合います。ですから「僕になって神に聞き従うこと」こそ平和の道にほかなりません。王制であろうと、議会制民主主義であろうと、この基本姿勢は欠かせないのです。そのために神の言葉を語りつつ、国のために執りなしの祈りをしていく務めが、教会の役割として欠かせないものになってくるのです。

【結】 大勢に流されないで

丁度2年前の全日本剣道連盟の機関誌に、話題の映画「タイタニック」にちなんで作られたアメリカの小話が紹介されていました。「沈没寸前にタイタニック号から救命ボートが下ろされますが、子ども、女性、老人が優先で、成人男子は海に飛び込んでもらうしかありません。船長は先ずイギリス人男性に言いました。『あなたはジェントルマンであることを存じています』。彼は黙ってうなずくと、デッキから海に飛び込んでいきました。船長は次にアメリカ人にこう言いました。『あなたはヒーローになります』。彼は微笑みを浮かべて飛び込みました。ドイツ人にはこう言いました。『これはルールです』。彼は毅然として飛び込みました」。

さて日本人に対しては、何といたのでしょうか。「貴殿はサムライである。婦女子のために一命を賭して欲しい」と言ったら、袴のすそをひるがえして、風のように波間に消えていったと言うのは以前の話で、今では通用しそうもありません。そこで船長はこう言ったそうです。「皆さんそうしておられますよ」。日本人は、自分の命にかかわる重大決定をする時になっても、皆に合わせようとするという小話です。

でも今日の8章20節のイスラエルの長老たちの答えをご覧ください。彼らもまた、「すべての国民と同じようになりたい」と言い張っています。周囲の国々が皆、王を持ち強くなっているから、遅れをとってはならないと言う焦りが表わされています。

日本の経済は、土地は値上がりするものという神話に踊らされて、我も我もと不動産投資を競いました。バブルがはじけると皆が大損をして、各企業の経営を行き詰まらせました。日本全体の借

金が膨大となって、今日にいたっても景気がなかなか回復しないで苦しんでいます。「皆と同じように」ということがいかに愚かであるかを私たちは、今骨身にしみて味わっております。

ですから世界の動きをよく見極めながら、皆もしているからという大勢に流されないで進んでいくことが大切です。そのためには、基本原理にしっかりと立ち続けなければなりません。大敗北から20年後に、イスラエルの人々はミツパに集まって神さまの前に悔い改めました。ペリシテの大軍に祈りをもって立ち向かいました。そして大勝利を得ました。彼ら自身が変わると、新しい歴史が開けてきたのです。

それからまた20年ほどの年月が過ぎました。そして歴史の流れの中で、いよいよ王が立てられることになりました。そこでサムエルはもう一度確認しました。「主を畏れ、主に仕え、主の御声に聞き従い、主の命令に背かず、あなたたちも、あなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならばそれでよい」(12:13～14)。この言葉にしっかりと立ち続けることです。サムエルの生涯は、このメッセージを繰り返し語ることだったのです。

私たちもサムエルに学び、国の指導者たちや国民に対してサムエルと同じ言葉を語り続けていきましょう。また国が道を誤らないように、執り成しの祈りをして行きましょう。